

主の公現

福音朗読 マタイ 2・1-12

2023.1.8

カトリック高円寺教会

主任司祭 高木健次神父

今日、わたしたちは主の公現の祭日のごミサをお捧げしています。主の公現、神様が救い主イエス様を全ての人に現わしてくださった、救いの道を全ての人に現わしてくださった、ということをお祝いする祭日になっています。

今日の福音の朗読では、東のほうから謎の人物たちが、占星術の学者って書いてあるし、「聖書と典礼」の解説にはゾロアスター教の祭司であるなんて言い切ってますけども、それはほんとにどうか分からない。名前はマゴイ、ペルシャ語のようでありますけども、星を見て、ずうっと星に導かれるっていうのは、聖書の中ではバビロン人の特徴ということになっています。でもその人たちが持ってくる黄金とか乳香とか没薬っていうのはアラビアとかシリアとかのもの。だからそういうようなのが全部混ざったような人々なので、イスラエルの人々にとっての周辺の神様を知らない人々の総称のようです。でも、そんな人にも、イスラエルの人には近くに住んでるからこそ余計「神様があんな者たちを救われるはずがないんだ」ってずうっと思ってた人たちにでも、神様は救い主をお示しになるんだっていうことを表わしてるんじゃないかなあと思います。

神様はどんなことを用いてでもご自分のほうに人々を導くことがお出来になる。聖書には「星を見て、星に導かれなさい」なんて書いてないですね。だけど、ずっと星を見ている人たちにとってはそれが一番とっかかりやすいので、神様はその星を導かれる。わたしたちの中にも、自然を見て自然の中に神様の御業を感じるっていうようなこともあるだろうし、あるいは、いろんな出来事の中に神様の導きを感じるというような場合もあるでしょう。神様はどんなことでも用いることがお出来になる。と同時に、聖書のみことばの中にはどこに行けばいいのか進むべき道が書かれている。たとえそのみことばを預かっている者がヘロデ王のような邪悪な者であっても、みことばそのものはちゃんと救い主を指し示し続けている、というところにも希望があります。

だから、今、わたしが皆さんに福音を読んだり説教したりしてますけど、わたし自身がそれにふさわしいかどうか、ヘロデ王のようではないと思いますけれども、そう思ってるだけでも図々しいって神様から言われるかもしれません(笑)、だけど、そ

ういう者を用いてでも、しかしまた、神様を求めている者にとってはそういう者でもそこからヒントを得ることができる、ということも今日のみことばは言ってる。だから、皆さんも忍耐強くわたしの説教を聞いて何かの参考にしようというような開かれた気持ちで聞くなれば、きっと神様が何かしらのヒントを与えてくれるでしょうけど、ミサの式次第がこういうことになってるから、説教が必ず入ることになってるのでしょうがないから我慢してるってことかもしれませんけども、それでもいいんだけど（笑）、わたしたちはあとでご聖体を通してイエス様に会いますね。そういう意味では、福音書が語る占星術の学者、東方から来た不思議な人たちの体験は、その人たちだけじゃなくて、イエス様、救い主に会いたいなっていう、神様と一致したいと思っている、神を求めている、救いを求めている全ての人の体験でもあると言っていいんじゃないかなって思います。

今日わたしたちもここにやって来て、そして幼子とご聖体のイエス様とマリア様が——ご像がありますね——いらっしゃるお家にやって来る。そして礼拝するわけですね。でも、一方で問われています。

このやって来た占星術の学者たち——そう書いてあるから——は、イエス様の前に礼拝して、そして自分の宝の箱を開けて、黄金、没薬、乳香をイエス様の前に差し出しました。それは、イエス様がそれを必要としているからではない。むしろ、その宝の箱の中に別のものを入れなきゃいけないから。それは、今まで自分たちが大切に頼ってきたそういう宝はイエス様にお預けいたします、お任せいたします、ということです。じゃ、その宝の箱の中に帰りには何を入れなければいけないかといえば、救い主を知ったというイエス様との繋がりで。わたしたちはミサのときには自分の中にご聖体を頂きます。その繋がりで。身体の中にいただきますけど、ほんとは心の中にイエス様をお迎えする。そのためにはやっぱり出さなきゃいけないものもあるんじゃないかということです。自分を支えているいろんな、プライドだったりとか、ずうっと手放さない恨みの思いだったりとか、党派心とか、いろんな自分が実は一番大切にしているもの。でも、一番大切にしているものをどけないと、イエス様を一番大切にすることができない、ということです。

そのあと福音書は、イエス様に捧げられたこの黄金と乳香と没薬はどうなったのか何も語ってないですね。エジプトに逃げるときに持って行ったのかな、置いて行ったのかな、黄金とかをもらってたからエジプトに行ってもやっていけたのかな、とかいろいろ。そうじゃないんです。その意味は、イエス様の前に預けるっていうことで、それを神様の前に差し出して、一人ひとりイエス様との、救い主との繋がりをいただく、それを救いにする、今まで自分にとっての救いと思って寄り頼んでいたものは

手放して、イエス様をそこにお迎えする、そういうことを表わしていると読んだ方が自然かなあという気がします。

そして帰りは、ヘロデのところへ帰るなどお告げがあったので別の道を通って帰って行きました。生き方は変わるはずなんですね。わたしたちも、いつもイエス様と出会い直そうとする。そのためにごミサにも参加するし、恵みを願います。でも、その度ごとに自分の宝の箱を開けないで、宝を持ったまま、そして帰り道もおんなじ道を通って帰るのか——もちろん物理的な道はおんなじ道かもしれませんが——、何を大切にするのか、どのように生きていくのかってというのは変わらなきゃいけないはずです。そう簡単には変わりませんが、だから何度も何度もイエス様に会い直して。出したはずの宝をやっぱりもう一回仕舞ってたりするんですよね。

なので、今日、ほんとに全ての人に、そして求めさえすればあらゆることを用いて、神様はご自分のほうに招いてくださるんだ、ご自分の救いへと与らせてくださるんです、というこの福音のみことばに信頼を置きながら、わたしたち一人ひとりが、じゃあイエス様とどのように出会おうとしているのかなっていうその在り方、自分にとってイエス様をほんとにお迎えするために取り除かなければいけない今まで入っていた宝として保存していたもの、その場所にはほんとに救い主をお迎えしなきゃいけない、その心の場所を占めているものはなんであるのか、そして「そこに戻るな」って呼び掛けられているような古い今までの在り方とか生き方があるだろうか、と思い起こしながら、神様の導きに信頼して、お互いのために祈りのうちに、主の公現の祭日のごミサをお捧げしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>